

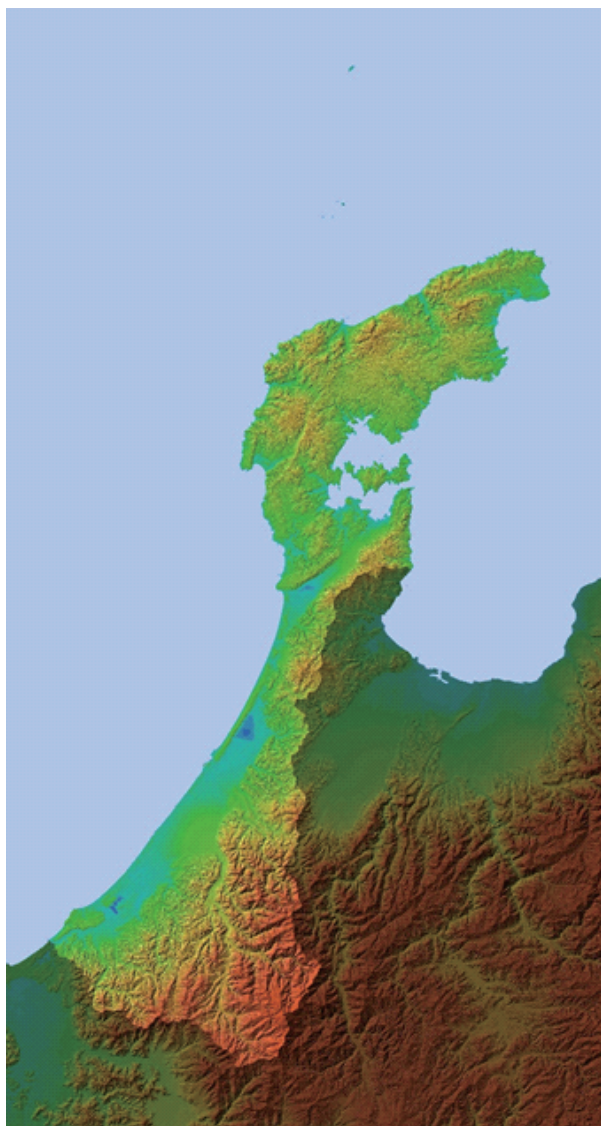
本州中部に位置する石川県は、日本海に突き出した能登半島を含む、南北に細長く伸びる地域で、長い海岸線地域から、白山を最高峰とする高山帯まで、変化に富んだ地形を有します。また、火山の活動もあるため、山系は複雑なものとなっています。その地形的特徴から、石川県は能登地方の北・中部区域と、加賀地方の南部区域および加賀低地区域に分けられます。

能登地方は、海拔高度 300 メートル以下の低山性の準平原が大部分を占めており、平野部は少なく、河川沿いの小規模な低地で特徴づけられます。北西側の外浦は、段丘地形が発達し、東側の内浦は、沈降性の入り組んだ静かな海岸線（溺れ谷）が見られます。半島の中央部には、断層が落ち込んで形成された邑知低地帯があります。そこを境として、北部区域の能登丘陵と中部区域の宝達丘陵に分けられます。

加賀地方は、白山御前ヶ峰を頂上とする険しい山地帯である南部区域と、そこから北西方向に流れる河川の浸食、堆積作用によって形成された南北に延びる沖積平野が広がる加賀低地区域に分けられます。南部区域は、山地や犀川・浅野川上流域の台地や能美・江沼丘陵、そして、白山などで形成されています。加賀低地

区域は、海岸沿いに砂丘と段丘が分布し、それらと丘陵地の間に三角州や海岸平野が分布しています。三角州および海岸平野は、縄文時代に海が現在の内陸部まで侵入して、その後、砂丘の発達で塞がれてできた潟湖が埋められてできました。河川は流程が短いため、急流となっており、河岸段丘が発達しています。手取川下流域では、扇状地が広がっています。

対馬海流の影響により、石川県は雪が多いながらも比較的温暖な気候です。その結果、豊富な水が山系を刻み、浸蝕した泥や砂などを堆積して、現在みるような地形ができました。



石川県の地形図



能登半島の一部



白山